

■はじめに■

歴史上の人物については、どうしても、概説書とか歴史の教科書に書かれていることが一般的に受け容れられる傾向にある。定説とか通説という形で広く浸透し、それが当然とされている。

しかし、定説とか通説とされているものも、実は、その人物の一面しかみていないというケースも少なくない。たとえば、この講座でも、詳しく追いかけることになる^{さいとうどうさん}斎藤道三・^{ほうじょうそうん}北条早雲・^{まつながひさひで}松永久秀は、「戦国三梟雄^{きょうゆう}」といういわれ方をして、^{あく}悪辣^{らつ}な手段で押し上がった三悪人といったとらえ方がされている。

ところが、研究が進むにつれ、この三人は時代を変えていった、むしろ変革者とみられるように評価が大きく変わっているのである。既成概念を一度捨て、改めてその人物を見直すことによって、これまでとは異なる歴史が見えてくるのではなかろうか。

◎斎藤道三：二巻第二章「斎藤道三」参照。

◎北条早雲：二巻第一章「北条早雲」参照。

◎松永久秀：二巻第四章「北条早雲」参照。

・梟雄：残忍で強く荒々しい人、悪者。また、その首領。

■下剋上は悪ではなかった■

戦国時代のキーワードとされているのが弱肉強食・合従連衡^{がっしやうれんこう}・下剋上の三つである。弱肉強食は、その字の通り、弱い戦国大名が強い戦国大名に食われていくという状況をさす。戦いに負ければ、領地が勝った側^{へいどん}に併呑されていった。

合従連衡というのは少し説明が必要かもしれない。どうしても、戦国大名は独立した権力なので、一匹狼のようにとらえられがちであるが、戦国時代、一人ではやっていけない現実があった。誰かと手を組む、すなわち同盟関係になるとか、場合によってはより強い戦国大名の保護を受ける、つまり、傘下に入るかということになる。

大抵は隣の戦国大名と同盟を結ぶ「近国同盟」の形をとるが、場合によっては、離れた戦国大名と手を結び、間に挟まれた戦国大名と戦う「遠交近攻同盟^{えんこうきんこう}」という形もあった。いずれにしても、どこかの勢力と結んで安全保障を確保することになり、これを合従連衡といっている。

そして、もう一つが下剋上である。江戸時代になると、「下剋上は悪である」といわれ、「謀反をおこすことは悪いことだ」となるが、これは、忠君を前面に押し出した儒教の考えに従ったもので、戦国時代には下剋上は悪ではなかったのである。どうしても、江戸時代の物差で戦国武将を見る傾向にあるので、悪人としてのレッテルが貼られてしまうが、既成概念を捨てるためには、下剋上は悪ではなかったという点をもっと強調されてもいいのではないかと考えている。そこで、次に、下剋上そのものの語義と、下剋上の具体例を何人か取り上げておきたい。

下剋上というと、建武の新政のときの混乱ぶりを鋭く衝いた「二条河原の落書」（『建武年間記』）の中にあるフレーズが有名である。すなわち、

※
このころ
此比都ニハヤル物、夜討、強盜、謀綸旨^{にせりんじ}、召人^{めしうど}、早馬^{めうば}、嘘騷動^{そらさわぎ}、生頸^{なまくび}、還俗^{げんぞく}、自

◆「二条河原の落書」（『建武年間記』）：建武2年（1335）、匿名の時局風刺文。

※）「この頃都に流行っているものは、夜人家に押し入って盗みをする者、強盗、偽の公文書、囚人、早く走らせる馬、嘘の騒動、生首、一度出家した者がもとの俗人に戻ること、一般人の自由な出家、急に羽振りがよくなった者、路頭に迷う者、所領を取られて取り戻そうとする者、恩賞目的でつちあげの戦、証文を入れた小箱、権力者に付き従う者、他人をあしざまに訴える人、禪宗と律宗の僧、下剋上をする者」といった意味。

由出家^{にわか}、俄大名^{まよいもの}、迷者^{そらいさ}、安堵^{あんこ}、恩賞^{おんしょう}、嘘軍^{うそぐん}、本領ハナルル訴訟人^{ほんりやうはなるとるしうそじん}、文書入タル細葛^{ぶんしやういりたるとるほそつづら}、
追従^{ついしやう}、讒人^{ざんにん}、禪律僧^{ぜんりつそう}、下克上スル成出者^{なりでもの}……

というもので、「下克上」とあるのは「下剋上」のことである。ここからは、当時の人が、下剋上のイメージとして描いていたのが成出者（立身出世する者の意）だったことがわかる。

なお、字はちがうが、奈良興福寺大乘院の尋尊^{じんそん}の日記『大乘院寺社雑事記』では、山城国一揆の蜂起を記したところで「下極上之至也」と書いている。尋尊も、上下の秩序を乱すこと、乱す行為そのものを下剋上にとらえていたことがうかがわれる。では、下剋上という言葉は、いつごろから使われるようになったのだろうか。この点について、これまでの研究では、中国の隋の時代、蕭吉^{しょうきつ}という人の撰になる『五行大義^{ぎやうたいぎ}』ではないかといわれている。この本は、陰陽道^{おんみやうどう}のテキストとして古代以来、日本に伝えられていたが、その第十論「相剋^{そうこく}」に、「凡そ上、下に剋^{おおよ}つは順たり。下、上に剋^{はく}つは剥^{はく}たり」と見える。つまり、上の者が下の者に剋つのは順であるが、逆に、下の者が上の者に剋つのは剥であるという。剥は、易の卦の名で、凶の意味に用いられているので、「上剋下はいいが、下剋上はよくない」という意識で使われていたことになる。

ところで、下剋上に、「下の者が上の者を倒して権力を奪取する」といったニュアンスをもたせるのはいつからかとなるとむずかしい。福尾猛市郎氏^{ふくお たけいちろう}はその著『日本史選集』で、一番早い例は『水鏡』ではないかとしている。前田本『水鏡』の第47代大炊天皇^{おおひ}の条に、恵美押勝^{えみのおしかつ}が下剋上の謀叛の企てを図ったという表現で出てくるが、下剋上イコール謀叛という意味で用いられた最初ではないかと思われる。このあと、貴族・荘園領主たちの間では下剋上という言葉はよく使われるようになり、たとえば、北畠親房^{きたばなちかふさ}は『神皇正統記』の中で、「下の上を剋^{じんの上をうしやうとう}するは極めたる非道也」といい、また、「東寺百合文書」の永和3年（1377）学衆評定引付^{がくしやうひやうじやうひきつけ}によると、東寺領播磨国矢野荘の農民が逃散したとき、荘園領主側が「自由^{くわだて}之企、下剋上之至」

◎福尾猛市郎：（1908～1990）日本の歴史学者、広島大学名誉教授。

◆『水鏡』：歴史物語。鎌倉時代初期成立の歴史物語。

◎大炊天皇：淳仁天皇（733～765）（在位：758年～764年）。天武天皇の皇子・舍人親王の七男。

◎恵美押勝：＝藤原仲麻呂^{ふじわらのなかまろ}（706～764）太政大臣となり専権を振るった。764年道鏡^{どうきやう}を除くため恵美押勝の乱を起こしたが敗れた。

といって非難していたことが知られている。

つまり、支配者たちにしてみれば、自分たちの立場をおびやかす非道徳な行為、退廃現象として下剋上をとらえていたわけである。

それに対し、下剋上をおこした側はどのような論理をもっていたのだろうか。結論からいってしまえば、一種の世直しという発想である。わかりやすい例として陶晴賢^{はるかた}の下剋上でその点を具体的に見ておきたい。ちなみに、陶晴賢は下剋上のあと、主君として迎えた大内晴英^{はるふさ}から一字を与えられてからの名で、本来は隆房^{たかふさ}と^{すえ}い^はた^がが、煩雑になるので、晴賢として記す。

陶晴賢は周防の戦国大名大内義隆^{おうちよしとか}の重臣筆頭で、周防国の守護代をつとめていた。その主君義隆が、天文11年(1542)から翌12年にかけての出雲月山富田城^{がつさんとだ}攻め、すなわち第一次月山富田城の戦いに失敗し、逃げ帰るということがあった。しかも、その敗走途中、養嗣子^{ようし}としていた晴持^{はるもち}が乗った船が転覆し、死んでしまうというアクシデントがあり、全くやる気をなくし、政治をほうり出しはじめたのである。

はじめのうち、晴賢が主君義隆^{かんげん}に諫言をしていたが、「諫言ではもうだめだ」と考えるようになった。晴賢が下剋上を決意するに至る心境を『大内義隆記』という史料が端的に記している。これは、大内氏の菩提寺である山口の龍福寺^{にっけいすう}八世日継^{えき}須益が著したと伝えられているもので、単なる家譜・軍記物ではなく、史料的には信憑性が高いといわれている。そこに、つぎのような一文がある。

※ 隆房^{りゅうぼう}申しけるやうは、天の与へをとらざれば、返つて其^(却)の科^{とが}をうく。時に至りて^(行)をこなはざれば、返つて其の科をうくと云本文あり。我が運も義隆の御運も、天道のはからひにてぞ候べし。

ここに「本文」とあるのは、中国の歴史書『史記』の淮陰侯^{わいいんこう}伝のことで、そこには、大意を取ると、「取るべき筈^{はず}のものとして、天の与える所を取らなければ、天罰を受ける」といった内容のことが書かれていたのである。

晴賢本人が『史記』のこの件^{くだり}を読んでいたかどうかはわからないが、この晴賢の

◎北畠親房：(1293～1354) 公卿、歴史家。

◎陶晴賢：二巻第三章「毛利元就」参照。

◎淮陰侯＝韓信：(?～紀元前196) 秦末から前漢初期の武将。漢の劉邦の元で数々の戦いに勝利した。漢の三傑の一人。

※)「隆房(陶隆房＝晴賢)がいうには、天から与えられたものを受けとらなければ、かえってそれは罪である。時期がきたときに行わなければ、かえって罪である。私の運も(大内)義隆の運も、天地自然の道理の判断によって決められているものである」といった意味。

いい分は下剋上の論理として正鵠^{せいこく}を射ていると思われる。要するに、主君義隆が政治をほっぽり出したことで、大内領内の領民が義隆の治政^{ちせい}に倦んできたという時代状況があったということが一つ。そしてもう一つは、晴賢が、そうした状況を見て、「義隆に替わる新たな主君の出現を望む空気が充満してきた」ととらえた点である。それがここでいう「天の与へ」であった。「いま、下剋上によって義隆を倒し、民衆を悪政から救わなければ天罰を受ける」という考えである。

晴賢は天文20年（1551）8月20日に挙兵し、山口の大内館を攻撃し、山口を逐われた義隆は長門国深川^{ふかわ}というところの大寧寺^{たいねいじ}まで逃れたところを追いつめられ、そこで自刃して果てているのである。

ところで、こうした悪政から民衆を守るため、すなわち世直しのためには下剋上もやむをえないという考え方は決して特殊な例というわけではなかった。下剋上をおこしたという例ではないが、戦国武将たちの間で、「追放され、滅ぼされる側にむしろ問題がある」という論法、言葉をかえれば、下剋上肯定の論理はかなり一般的だったのである。

戦国大名後北条氏の支城の一つ相模国玉縄城^{たまなわ}の城主だった北条氏繁^{うじしげ}は、実に珍しい印文を刻んだ印判を用いていた。その印文というのは、「顛趾利出否」の五文字である。「趾^{あし}を顛^{さかさま}にして否^ひを出すに利^りす」と読む。織田信長の「天下布武」とか、徳川家康の「福德」というのなら、すぐ意味がわかるが、「顛趾利出否」では何をいっているのかわからない。

実は、これは、中国の古い易の本『易経』^{えききょう}、すなわち『周易』^{しゅうえき}にあるもので、「鼎、顛趾利出否」からきている。鼎^{かなえ}というのは中国で使われていた貯蔵具で、いつまでもそのままだと、中身が古くなり腐ったりするから、時には鼎の趾をひっくり返し、中の腐ったものを捨てるという意味である。

これが、もののたとえであることは一目瞭然で、既存の体制や秩序をひっくり返すことによって新しいものができる。つまり、ものごとが刷新されるというわけだ

◎北条氏繁：（1536～1578）後北条氏の家臣。北条氏康に仕える。武勇に優れ、武田氏との戦で先頭にたって戦っている。

◆『易経』：儒教の基本書籍である五経の一つ。占いの理論と方法を説く書。

ある。一種の革新思想であり、これが武将たちの下剋上の論理の根底にあったことを見ておかなければならない。



「顛趾利出否」の印
(森文書)

■歴史は勝者が書く勝者の歴史だった■

このように、戦国時代には悪い主君を討つことは決して悪ではなかったのである。しかし、前述したように、儒教的武士道徳で、君に忠であることが強調されるようになるにつれ、「武士は二君に見えず」といういい方が生まれ、下剋上の考えは否定されていくことになる。

そしてもう一つ、歴史の描き方が関係していた。歴史はどうしても勝者が書く勝者の歴史になってしまうことで、本来のというか、正しい歴史が伝えられなくなる傾向がある。

たとえば、大内義隆を下剋上で討った陶晴賢の場合をみてみよう。一般的に、現在、晴賢は謀叛人として悪人の方に分類されているように思われる。それはなぜかといえば、晴賢はその後、天文24年（1555）10月1日の安芸厳島の戦いで毛利元就と戦って敗れ、自刃しているからである。勝った側の毛利氏の記録が残り、「主君を討った晴賢を毛利元就が倒した」という宣伝材料に使われる結果となった。

◎毛利元就：二巻第三章「毛利元就」参照。

この点は明智光秀^{あけ ち みつひで}についてもいえる。光秀のおこした本能寺の変の要因については諸説あるが、私自身は光秀の下剋上、すなわち世直しというわけで、信長の暴走を止めようとしたものと考えているが、世間的にはどうしても「主殺しの大悪人^{しゅうころ}」といったいわれ方をしている。それは、このあと天下を取った豊臣秀吉が、自己宣伝と合わせ、光秀を悪人として描いたからである。

秀吉は、山崎の戦いで光秀を破ったあと、右筆の大村由己^{ゆう こ}に『惟任退治記^{これとう}』という本を書かせている。そこには「惟任^{*}が謀反」という文字が頻出し、いかにも謀反人光秀を秀吉が討ったということが目立つ書き方になっている。

光秀とのからみで、もう一つ、「歴史は勝者が書く勝者の歴史になるんだ」という思いを抱いたことがある。例の「藤吉郎金ヶ崎^{かね が さき の}の退き口」とよばれる一件である。元亀元年（1570）4月、織田信長が越前の朝倉攻めに向かったとき、信長の妹お市の方を娶り、信長と同盟を結んでいた北近江の小谷城主浅井長政^{あざ い ながまさ}が反旗を翻した。信長は急遽、京都へ逃げもどるが、そのとき、殿^{しんがり}をつとめ、朝倉軍の追撃を金ヶ崎城で防いだのが秀吉とされてきた。小瀬甫庵^{お ぜ ほうあん}の『信長記』には、秀吉一人が殿を志願し、信長も秀吉に任せたという書き方になっている。その部分を引用しておく。

……さらば是^{これ}より引返し、先^{ひきかえ}浅井一党^{まずあざ い っとう}の逆徒等^{ぎやく と}、一人も洩^もらさず退治^{たい じ}して候。当国^{とうこく}をば静むべし。さて金崎^{かねがさき}には誰^{しづ}をか残し置べしと、僉議^{せんぎ}区^{まちまち}なりし所に、木下藤吉郎秀吉進出申されけるは、某^{すすみで}残り申すべく候間、御心安く引取させ給へと、心よげに申されければ、汝^{なんじのこり}残て朝倉が勢を押へ候はんとかや、尤^{おさ}切なる忠節^{もっともせつ}浅^{ちゅうせつ}からずとて、是^{のき}より引取退させ給ふ。

これで見ると、金ヶ崎城に残って殿をつとめた武将は秀吉一人だけだったことになる。ところが、『武家雲箋^{うんさん}』という史料集に、年付^{としづけ}のない5月4日付の波多野秀治宛^{はた の ひで はる}一色藤長の書状が収められており、それによってちがう状況だったことが浮き彫りになってきた。

一色藤長は若狭の武将、波多野秀治は丹波の武将で、一色藤長が、越前および若

◎明智光秀：三巻第七章「明智光秀」参照。

◎惟任＝明智光秀。

◎浅井長政：(1545～1573) 北近江の戦国大名浅井氏の3代目。北近江の北東部に勢力を広げていた。妻の兄織田信長と同盟を結び、浅井氏の全盛期を築いていた。

狭でおこっていることを波多野秀治に報じたものである。書状なので年付がないわけであるが、内容から元亀元年のものであることがわかる。信長が浅井長政の離反を受け、退路を断たれる前に大急ぎで撤退していったときの状況が書かれている。注目されるのは、その書状に、「金ヶ崎城に木藤・明十・池筑その外残し置かれ……」と記されている点である。「木藤」はいうまでもなく木下藤吉郎で秀吉のこと、「明十」は明智十兵衛尉で光秀のこと、「池筑」は池田筑前守勝正^{かつまさ}のことで、このとき信長は、秀吉だけでなく、明智光秀・池田勝正も金ヶ崎城に殿として残していたことがわかる。

こののち、池田勝正はこれといった働きがなく、歴史の表舞台から消えてゆき、光秀も本能寺の変のあとの山崎の戦いで秀吉に敗れ、敗死しているため、一人勝ち残った秀吉が手柄を独り占めした形である。

もう一人、歴史は勝者が書く勝者の歴史だということを端的に示しているのが敗者今川義元の例である。

今川義元といえば、永禄3年（1560）5月19日、駿河・遠江・三河3か国2万5000の大軍で尾張に攻め込みながら、たった2000の織田信長に桶狭間の戦いで敗れたことから、軟弱武将のレッテルが貼られてしまった。曰く、「馬に乗れず輿^いに乗って出陣していた」。曰く、「お齒黒をするなど公家風だった」などである。

しかし、輿に乗っていたのは、馬に乗れなかったわけではなく、室町幕府第13代将軍足利義輝^{よして}から特別に輿に乗れる許可を得ていたからであるし、お齒黒も、当時、上級武士は男もお齒黒をするのが一般的だったわけで、公家風だったというわけではない。

義元は、武田信玄と上杉謙信が戦った川中島の戦いの第2回戦で、両軍の間に入って戦いをやめさせていたことが知られている。仲裁役ができたということは、義元が信玄・謙信と同じくらいの力をもっていたからである。しかし、敗者義元は、どうしても勝者信長の引き立て役となってしまったという印象がある。

◎池田勝正：（1539～1578？）摂津池田城主。織田信長に攻められ降伏、摂津三守護のひとりとなる。

◎足利義輝：（1536～1565）室町幕府第12代将軍義晴の子。

◎今川義元：二巻第五章「今川義元」参照。

■「天下取りの三英傑」の虚像と実像■

さて、その今川義元を倒し、颯爽と戦国乱世にデビューを果たした織田信長、さらにその死後、織田政権を篡奪していった豊臣秀吉、秀吉死後、豊臣氏に代わって実権を握っていった徳川家康の三人について、概説書や教科書に描かれている歴史の表だけでなく、裏側も覗いてみたい。

まず、織田信長であるが、若いころ、「尾張の大うつけ」などといわれ、奇行癖があったことで知られている。たしかに、奇抜な恰好をして出歩いたり、父親の葬儀のときには位牌に抹香を投げつけたりということもあるにはあったが、「うつけ」とされるのは、信長の思考が常識外れだったということもあったのではないかと考えている。一般人の常識がついていけなかったということである。

たとえば、信長は今でいう道路のインフラ整備にも取り組んでいるが、どこからそんな発想が生まれてくるのか、びっくりするようなこともやっている。信長は道路の幅を拡張しているが、ただ拡張するだけでなく、その道路の必要度^{*}というか、重要度によってランクを決め、幅を変えているのである。本街道は3間幅、脇街道は2間幅、在所道は1間幅である。ちょうど、本街道が現在の国道、脇街道が都道府県道、在所道が市町村道という感じである。しかも、場所によっては今でいうバイパスも造っており、それまで川にはほとんど橋が架かっていなかったが、橋を架けているのである。

また、信長の人事もすごい。それまでの譜代門閥^{ふだいもんぼつ}人事をやめ、能力本位の人材抜擢を行っていた。木下藤吉郎秀吉、明智光秀ら、「中途入社組」もどんどん出世していったのである。ただ、人使いが荒かったことも事実で、また、家臣からの諫言などは聞く耳をもたなかったことも知られている。信長から厚遇されたルイス・フロイスも、その著『日本史』の中で、「彼はわずかしき、またはほとんどまったく家臣の忠言に従わず、一同からきわめて畏敬されていた」と述べている。

※) 1 間 = 1.8m

・譜代門閥人事：代々、家の系統を継いでいることや、家の格づけを重要とした人事。

この点で思いおこされるのが、明智光秀の本能寺の変である。本能寺の変、光秀謀反の真相は何か「日本史最大のミステリー」などといわれているが、織田家臣団トップになった光秀が主君信長に異見（意見と同じだが、当時はこう書いた）をいったとき、激昂した信長が光秀を足蹴にしたり、頭をたたいたこともあったのではなかろうか。従来は、これら行為を単なるいじめとして、怨恨説の根拠としてきたが、人を人とも思わない信長の暴走を止めようとしたということも考えられる。すごいことをした信長ではあるが、一面では人間失格ということもあったのではなかろうか。

次に豊臣秀吉である。貧しい百姓から関白、最後は太閤にまで上り詰めたことは、日本人の出世願望を代表するような生き方といってよい。太閤検地・刀狩りをはじめ、いくつかの政策はその後の江戸時代における幕藩体制の基礎を作ったことは周知の通りである。

ただ、それら諸政策が秀吉一人のアイデアからはじまったものかどうかは疑問のあるところといわねばならない。概説書や教科書、さらにはそこに書かれている年表などは、どうしても代表者一人の名前が載ることになる。本当は、たとえば秀吉の弟豊臣秀長^{とよみひでなが}や、家臣の石田三成がやったことでも、代表者秀吉の功績としてカウントされているのが実情である。

おそらく、現在、伝えられている以上に、まわりの人の果たした役割は大きかったであろう。それは、天正19年（1591）正月22日に、弟秀長が亡くなった途端、秀吉の暴走がはじまったことから明らかである。

「天下取りの三英傑」といわれる最後の徳川家康であるが、家康というと、「我慢の一生だった」というイメージを描いている方が多いのではなかろうか。それは、家康遺訓といわれるものに影響されているように思われる。例の「人の一生は重荷を負て遠き道をゆくがごとし、いそぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし」というフレーズではじまるもので、いかにも忍耐の一生だった家康の言葉だと思わ

◎ルイス・フロイス：（1532～1597）ポルトガル出身のイエズス会宣教師。永禄6年（1563）に日本に上陸。信長の信任を得て布教活動を行う。数々の記録を残している1冊が『日本史』。

◎豊臣秀長：（1540～1591）豊臣秀吉の弟。豊臣政権において内外の政務、軍事面で活躍をした。大和・紀伊・和泉の3か国に河内国の一部も含め、110余万石の大名となる。

◎石田三成：三卷第十一章「石田三成」参照。

れている。

しかし、この家康遺訓といわれるものは家康のものではなく、水戸黄門の名で知られる徳川^{みつくに}光圀の教訓書「人のいましめ」をベースにして創作されたものであった。6歳から8歳まで尾張の織田^{のぶひで}信秀（信長の父）の人質、8歳の途中から19歳まで駿河の今川義元の人質となっていて、その辛い体験が家康を作り上げたといわれることがある。ただ、今川人質時代、身分的にはたしかに人質ではあるが、かなり優遇された人質だったことが知られている。今川義元の軍師^{せつさい}雪斎から兵法だけでなく、人の上に立つ心構えなども教えられていたのである。こうしてみると、家康の場合、今川義元の人質になっていなければ、のちの天下人になれたかどうかはわからないともいえそうである。

◎徳川光圀：(1628～1701) 水戸藩の第2代藩主。水戸藩初代藩主・徳川頼房の三男。徳川家康の孫に当たる。『大日本史』の編纂を行う。また、徳川綱吉期には幕政にも影響力を持った。

◎織田信秀：(1511～1552) 信長の父。勝幡城城主。野心家にして、今川家の那古野城を手に入れるなど、勢力を拡大。しかし、途中その勢いはとまり、42歳で没している。

◎雪斎=太原崇孚^{たいげんそうふ}（1496～1555）駿河の善得寺、京都の建仁寺で修行。秀才として名高く、今川氏親から仕えるよう要請され、氏親の五男・芳菊丸（のち義元）の教育係になる。ともに建仁寺、妙心寺で修業。善得寺に戻る。宗教的な影響力だけでなく、政治・軍事・外交面において義元を補佐した。

■おわりに■

その家康は、先に走った織田信長・豊臣秀吉の二人をよく見ていた。いい面、悪い面を見て、いい面は受け継ぎ、悪い面は反面教師として是正していくことによって、260年の長期安定政権の礎を築いていったのである。

このことは、歴史上の人物を見ていく上で参考になるのではなかろうか。一面的に見るのではなく、多面的に見る能力を培うことは現代を生きる私たちにも必要な能力といってよい。

一面だけの先入観にとらわれていては解決できない問題もあるだろうし、決めつけによって誤解を生じさせることもある。また、こうした偏見や先入観は人間関係にも大きく影響するもので、しばしば相手の本質を曇らせてしまう。それによって関係が悪化したり、悪い評判を下したりしてしまうことがあるかもしれない。あなたが上の立場であれば、なおさらそうしたことがあってはならない。戦国時代でなくとも、部下は世直しの感情を抱くかもしれないのだから。

さて、本講座で取りあげる11人は、これまで、どちらかというともマイナスイメージで語られることが多かったように思われる。歪曲され、勝者によって貶められた人物像を学ぶことで、本当の歴史、あるいはその人物の本質が見えてくるはずである。ここで得られる体験を、ぜひ日常やビジネスでも活かして欲しい。